

西藏喇嘛教史

(第三回、完結)

寺 本 婉 雅

第五章 西藏佛教の改革

第一節 新教黃派の樹立と宗喀巴

宗教闇黒時代 釋尊降誕より二千二百七十九年、西藏に釋迦佛像を請來して、西藏文化の曙光を關きし護法の君主蘇隆替甘普王の誕生より七百三十二年、阿提沙の西藏に來りしより三百十九年、阿提沙入寂より三百零二年を經過せし時代は、已に五濁の波高く渦巻き、愛慾の曠海荒れて、慈航の船筏影没し、天地闇憺模朧として世は擧げて鬭諍堅固の時代となりぬ。一千有餘年間、西藏人民の開發を謀りし精神的開導者、社會の燈明、民衆の生命なりし西藏佛教も、滯溜の水長く清澄を保つ可らず。何日しか汚穢涸濁を催し、滙澤腐虫發生して、眞摯なる宗教的渴仰を醫すべくもあらず、堤堰の破壊しては、弊流奔蕩、滔々社會に漲り、舊教紅派の弊害亞細亞高原を掩ひ、人心其歸趣に迷ふ。彼ランダルマ王の破壊は、即ち國家的闇黒時代にして此は、即ち宗教的闇黒時代なりと云ふべし。

宗喀巴の宗教改革 此の時に當りて一世の偉人、宗教改革者宗喀巴(Tson-Kha-Pa)は丁酉の歲、青海の邊り、安土アムドの溪澗に羊牧者の子にして呱呱の聲を擧げぬ。宗喀巴年稍々長するや、父母を辭し笈を負ひて西藏拉薩に上る。當時舊教紅派一般の弊害は膏盲に陥入り、闇憚たる妖雲雪山の高原を蓋ひ、眞如の月影將に隠れんとするを見ては、慷慨悲奮抑えんと欲して抑ふる能はず、彼をして只尋常一様の凡俗喇嘛として世を終らしむべくもあらず、黒雲を拂ひ、濃霧を散じて、天真獨朗の月影を觀んとすの淨念は、即ち茲に西藏佛教改革の萌芽となり、革新の燧火天の一角より揚りぬ。宗喀巴は自己の此大事業は、卽是れ佛陀の使命なりと信じ、身を犠牲に供して現在の弊風を根本的より打破し、佛在世の清淨玲瓏たる淨行相應の佛教に立戻らしめんと欲しぬ、此天職を成就せんには、先づ諸處を遊歴し、舊教諸派の奧義を探究せざるべからずとなして、その求道研鑽に衛藏諸處を巡歴し、湮滅の傳系を探り、闇晦の法道を辿りて、學識該博、佛典の眞髓を極め佛陀の全智を獲得するに至れり。然りと雖彼は當此を以て足れりとせず、進んでは外來傳系の清規一切を研盡せん爲めに、牟尼の命令、及び其一切註疏論理等に自己の全身を投じ、見聞思考に瘦瘁し、觀念に沈み以て其が一切の淨行を體驗修得せり。

舊教各派の弊害 當時西藏に於ける舊教諸派の徒は、古代大聖世尊の説き給ひし命令清規に反し、各自己の見識に準じて解釋し、各自法幢を樹て、門戸を張り、派を起して諍論し、末派を逐うて本

源を忘る。自派は是れ世尊の眞髓を得たるものにして、他は是れ聖者の本旨に悖る異端なりと擯斥し、相互に井蛙の見を免れざりき。清烈純潔の思念を有せる宗喀巴ツォンカバは、是等の紛亂状態を觀て舊敎各派の末流に走るが如き弊風なからしめんと欲し、刷新清淨の傳道を企圖せんには、釋迦直説の戒律的宗風を以て濁穢せる社會を律し、以て佛敎の眞髓を闡明せんに如くはなしと思惟しぬ。

經と曼特羅との研究 此に於て諸大乘の清淨なる道法を持し、經と曼特羅との諸道に就て、精密なる鑿穿研究を遂げ、傍ら文殊菩薩に祈願を凝らし、經と曼特羅との奧義眞髓を遺憾なく聞きぬ。かくて宗喀巴は雪山の國に、釋敎の根源たる聖法成律を世尊自己の思惟の如く、極めて嚴格に宣布實修せんを希望す。

改新の旗幟 仍て彼はナムツェン・テンマ寺 (gNam-Rtsen lten-ma) に於てゼツン・ンゲーフ (Rjie-bTsun Red-mDaha Pa) 及び、ゼー・チャブチュク・バルザン (Rjie Skyabs-mChog dPal-bZan) とに會合して、毘那耶の各條規に就て精密に檢査し、三人共同的にその擴張傳道に努め、釋迦の再現せし如く、戒法を嚴格に守修する比丘敎團を敎育して、改新の旗幟を鮮明樹立せり。此時彼は高弟ダルマリンツェン (Dar-ma Rin-Chen) に命じて、精確に驗定せる毘那耶の規律を書寫せしめ、後世の誤謬を防備せり。是れよりナムツェン・ランマ派の沙彌敎訓、及び同派の比丘敎訓の二派の敎學法分出せり。

ガルドン寺建立 後ち宗喀巴はガルドン寺 (dGa-lha-Ldan Rnam-Par Rgyal-Baḥi Glin) を創建せん

とて、高弟ダルマリツェン(或云チャツアブゼ)、及び高弟ケチュブゼ (mkhas-grub-ri'e) との二人にその監督を命じ、地所を選定し、石碎を堆積して築き、僧房厨房に至るまで悉皆法に叶ひ、規條に準じ、大小粗細漏すなく、僧房規定の建築法を應用して、新教黃派の根本道場となしぬ。

ゲンドウンチュブの傳系 宗喀巴は弟子ゲンドウン・チュブに多くの訓誡と毘那耶とを殘らず授け、

其戒律的宗風の擴張宣布を勉めしむ。而して自己の穿ちし古裳シヤンタクを彼に與へて傳系の遺品となしぬ。

弟子ゲンドウン・チュブはバンエル地のロサ村 (Gro-sa) に生れ、幼名をマルトンズ (Smar-Ston-Pa)

と云ふ。宗喀巴は彼に戒律の學行を教へ、規條淨行の一切を授けぬ。宗喀巴の眞摯なる薰陶を蒙り

し彼は、正法毘那耶を繼承せるのみならず、毘那耶に於て熟練到達し、その淨行實修は完全無缺に

して、當時の腐廢せる教界中の道德的標榜となり、嶄然一頭角を顯すに至り、師に従て名聲赫々と

して僧伽ゲンドウンたるの行爲を完成す。此の故に彼名をゲンドウン・チュブと命せしなり。

ゲンドウンチュブの著書 師宗喀巴の意志を受け繼ぎしゲンドウン・チュブは多くの著書を出せり。

毘那耶に關する著書の主なるものは、戒律經大寶鬘精釋 (ḥDul-Ba mDoḥi Rnam-pḥad Chen-Mo

Rin-Chen Phren-Ba)、戒律根本阿含部全髓集疏 (ḥDul-Ba Luḥ-Sde bSḥiḥi gNad-kun bSḥus-Te

Gren-gShi) 悟讚主示十萬疏 (Rtogs-Pa bRjod-Pa gTso-For Ston-Paḥi Gren-hBum) 其他四分律の

根本たる解脱戒經等に關する多くの註釋を著はしぬ。

札什倫布大學の創立 彼は師の命令に従ひ、後藏に札什倫布大學 (bKra-Ces Lhun-po) を創立し、沙門比丘の敎團に充て、布薩會、安居、淨罪戒の三種淨戒 (gShi-gSum) を學規として有爲の學徒を敎育し、戒律の實修を嚴勵し、以て新宗敎の勢力を養成しぬ。曾て宗喀巴より授けられたる古裳シヤンタフと、釋迦の舍利とを藏含する釋迦佛の銅像一軀を作り、是を札什倫布の本尊となし、佛敎宣布の對象として、永久不滅の根本道場たらしむ。彼の時より今日に至る迄、連綿として札什倫布大學の盛大を極むるは蓋し此の因縁あるに由るなり。

宗喀巴の委任 宗喀巴は高弟チャクバ・チャルツァン (Grags-Pa Rgyal-mTshan) に戒行の傳播に努力奮勵すべきを諭し、同時に四方より馳せ集りて、宗喀巴の弟子となりて具足戒を受けんことを乞へるもの、其數枚擧に暇あらざりし程なれば、彼に命じて、彼等夥多の新發意の門下に比丘戒を授け、各門下の目的を成就すべく委任しぬ。此を以て彼を字して戒律者と稱し、名聲甚だ高かりき。

チャクバ・チャルツァンの著書 戒律者チャクバ・チャルツァンは、宗喀巴の敎訓を寫記して左の書を著はす。

- 一、戒律大學修 (hDul-Ba'hi bSlab-Bya Chen-Mo.)
- 二、三根本儀軌 (gShi-gSum-Gyi Cho-Ga.)

四、戒律序及悟讀書
(hDul-Bahi Gen-gShi Dan Rtogs-Pa bRjod-Pa Glegs-Bam.)

五、沙彌學修律儀註解
(bGe-Tshul-Gyi bSlab-Byahji Sdom-Tshig-Gi Thi-Kaha.)

尙宗喀巴は多くの隨從者をして、教法の根本たる聖法戒律の好愛と、戒法教修の遵守、及び戒律の行事を精密に知らざるべからざるが故に、戒本根本の眞髓を蒐めし戒經を充分研鑽して、法の如く修學せざるべからざればとて、彼等に了解し易からしむる様、根本戒法中の難澁なる意義を説明して、之を寫書せしむ。

レブン大學の創立 宗喀巴の直弟ジャミヤン・ツェーゼー (hJam-dByanis Chos-Rje) は師の命令を奉じて、レブン大學 (hBras-Spuus) を創立し、僧伽の部衆を開きて律的敎團敎育に盡力したり。

改新の偉業 是等諸門下の傳道に依て、新敎改革派の勢力は堂々當るべからざれば、腐敗膏骨に徹せる舊敎紅派の敎勢頓に振はざるに至り、改新の新空氣は西藏の天地を吹いて、清涼壯快到社會歡呼の裡に改革の偉業を奏しぬ。宗喀巴の宗敎改革に毘那耶を旗幟とし、舊敎に對して絶呼獎勵せる眞意を察せば、舊敎の墮落腐敗の原因は、果して那邊に存在せるかを推知し得べし。

第一一節 新敎の勢力、宗喀巴門下の著書

新敎青海より起る 西藏佛敎破壞後の境外に於ける復興事業や、實に慘憺たるものありしなり。闡

黒に彷徨し、信仰の燈明を失へる社會人類を救濟せんとして焰ゆるが如き熱誠と、大誓願との能力を成就せしラツェンゴンバ・ラブサルは、唐古人種の巢窟安土^{アムド}地方に出で、將に湮滅せんとする佛教の殘灰燒幹より、僅かに一縷の光明を得て之に材幹を投じ、信火を燃やせしかば、教煙再び青海の邊りに揚るや、是を眺めし聖法護持の祈願者は四方より馳集りて、ゴンバ・ラブサルに師從し、相共に佛教再興に盡力しぬ。彼ルーメー等の賢者十名は安土地より法と毘那耶との教理を得て、衛藏^{ツァン}二州に來り、諸處を錫歴し、恢復傳道に身を屠し、百難を排して専ら佛光宣顯に努力せり。護法王イーシ・オッド及び子息甥等を始め、ローツェン・リンツェン・ザンボ・シャンシユン人ヂャルビー・セラブ等は、上方ガリー地より崛起して、毘那耶傳燈に依て教勢復興に熱誠奔走せしかば、喇嘛教の氣焰漸く膨脹せる機運に際し、偉人宗喀巴は出で、宗教改革を絶呼し、遂にその新教の樹立を見るに至りしなり。

新教黃派の版圖 宗喀巴の開きし新教黃派の宗風は殆ど亞細亞大陸に蔓延し、西方ジャランドラ (Jalandhara; Punjab; now Jalandra) より、東方海邊に至るまで、廣袤數萬里の間に擴がり、教勢旺盛を極め、純潔なる道德的佛教の信友、或は僧伽の膨脹せる、宛然釋迦の再現し給ひて傳道せるに似たり。げに雲霧を拂ひて玲瓏たる眞月天に冲せるとき、慈氏菩薩親たり出現し、宗喀巴に告命して曰く、波は佛教に通達せる大聖世尊に等しきが故に、その人類救濟の使命も亦世尊の如く宣布せ

ざるべからずと。

古雪山中、西藏人民の開拓たりし恩惠者祖宗三王を始とし、大堪布菩提薩埵カンフエンボダイサト、及び蓮華生上師等バトニサンハバ出で、佛教を傳道し、固陋なる風習を拂ひて西藏の文化に多大の貢獻をなしたり。

阿提沙の靈感 中世闇黒時代を経て、佛教は西藏の國外に去り漸く其餘脈を繼續し、將に挽回の緒に就かんとするや、後より眞摯熱心なる後代傳系者阿提沙來藏し、頻りに佛教の刷新を唱へ、次でアヂシヤの靈氣を享けし宗喀巴は、改革の旗を翻して有爲の門下を養成し、相共に袂を別ち、手を分け、舊教各派の教理及び行動の世尊の法規に睽違するもの甚だしきを喝破し、その弊害と違法とを指摘し、之を打破して餘すなく、特に經と曼特羅との完全なる根教に依て自己の闡明せる戒律的宗教の宣布は、世尊説法の眞髓たると共に、戒律淨行の比丘教團は佛教の生命なりと主張し、藏民をして信仰の岐路より救ひ出さんと衷心より叫び、甄別識眼に富める多くの賢哲にその主義を勸説せり。

四個大學 宗喀巴の改革的宗教宣布の効や空しからずして、日を逐ひ年を加へて盛大に起き、四方に戒律を旨とする教團崛起し、その勢力舊教を壓倒し、加之四個の大學の創立より新教の勢力破竹の如く、激湍奔流當るべからざるものあるに至れり。

宗喀巴弟子の著書 宗喀巴の弟子中聰明優秀なる者にして毘那耶を學び奧義を窮めし者は、毘那耶

の註解をなして各自に著書せり。宗喀巴の二大弟子と稱せる隨一ケチユンゼは、戒律清規精註論牟尼教儀軌 (hDul-Bahi bCas-mIshams-La Dag-Ter-Gyi bStan-bCos Thub-bSton-Kyi Cho-Ga) を著はし、持戒者ローンベンは沙彌の學びを註解五十箴言を著はし、班禪シャンヂ (Ganti) は、戒律註解寶鬘考概義 (hDul-Tahika Rin-Chen Phren-Pahi dGons-Pa Spyi-Don) を、意義の兩端を離れる法門に依つて真正の道に達せられ得よを、戒律中樞見燈 (hDul-gShun lta-Bahi Sgron-Me) の著書あり。班禪ローンツサン (Pan-Chen Blo-Gros Legs-bZan) は、戒律註解寶鬘考を一層闡明せる註解寶鬘考飾論 (bStan-bCos Rin-Chen Phren-Bahi bGons-Rgyan) を著せり。班禪ローンツニヤは同く、現時戒法勝樂日響 (Den-Saṅ hDul-Ba bDe-Legs Ni-Mar Grags-Pa) を著せり。ガナン・ロザンツヘーチ・ヂヤンツマンは二百五十三戒條目明宗要略 (Khrim Nis-bRgya lña-bCn Rsa gSum-Gyi Nos-hDsin gSar-Bar Ston-Pahi Sho-Tshig) を、持三誓式日出修楷程 (Sdom-gSum-Ldan-Pahi dGe-Slön-Gyis Nin-Shag Phrags-gCig-La Ji-Ltar Bya-Bahi Rin-Pa) を、律正護勸令 (Jshul-Khrims Yan-Day-Par bSrun-Bahi Man-Nag) を著せり。カーノン・ロザンヂヤムツォ (第五世達賴) は、戒律教修明宗要略 (hDul-Bahi bSlab-kye gSal-Bar Ston-Pa Nun-Du Rnam-gSal) 及び戒律黃衣最勝儀軌 (hDul-Bahi Las-Chog Rnam-Rgyal gSer-mDog) を、其外四個大學の益盛大を極め、長老等の數増加するに従ひ、その階級制度の必要より、戒律概義 (hDul-Bahi Spyi-Don) 一切意義の究極にまで達する知

識、即ち兩端を際斷するを要する爲めに、斷際儀軌 (mThana-gCod) を著はす。儀軌修習 (Cho-Gahi Lag-len) 等の多くの著書あり。而して此原著者も亦戒律に就て註釋書を作りぬ。即ち淨罪、布薩、安居の三聚淨戒の實行を説明せる三根本明行 (gShi-gSum gSal-Byed)、宗喀巴の著書なる戒律海藏 (hDul-Ba Rgya-mTshohi Shi-po) を註解し、戒律中樞燈明記 (hDul-gShun gSal-Bahi Sgron-Me) を著す。尙又沙彌學修律儀 (dGe-Tshul-Gyi bSlab-Byahi Sdom-Tshig)、沙彌學修廣釋說光藏 (dGe-Tshul-Gyi bSlab-Bya Rgyas-par bCad-pa Hod-Ldan Shi-po) 比丘學行律儀戒藏 (dGe-Slon-Gi bSlab-Byahi Sdom-Tshig hDul-Bahi Shi-po)、優婆塞沙彌比丘律儀勸令儀軌 (dGe-bShen dGe-Tshul dGe-Slon Rnams-Kyi Sdom-Pahi hBogs-Chog Lun)、現代布教樂濟戒衣儀軌 (Den-San-Gi gDul-Byos Go-bDe-Bar bCos-pa bDul-Bahi Las-Kyi Cho-Ga) 利俗進信律儀濟儀軌修習明纂 (Khyim-Ba-La Phan-gDag Pa bShen-gNas-Kyi Sdom-Pahi hBogs-Chog Lag-len gSal-Bar hKod-Pa)、十六羅漢考證 (gNas-brkan Chen-po bCu-Drug-Gi Rtogs-brJod) 等あり。其外佛陀より漸次教系を経て、吾人の慈悲心に富める諸の喇嘛に至るまで、聖教を完全に護持し、寫瓶一如に繼承して、「菩提道品」の著者宗喀巴に至るまで、其間に於て毫も傳燈の斷絶なき、教界の經過狀態を叙述せる佛敎史等の著書あり。

西藏佛敎の變遷與頽を述ぶること略上叙の如し。嗚呼吾人多くの佛光宣揚に熱誠なる喇嘛出で、百難を排し、千辛の苦を嘗めて、聖敎を宣布せし其方法の如何なるかを沈思默考せば、是れ實に慘憺たる布 宣揚の痕跡にして、熱誠なる諸喇嘛の不惜身命に傳道せし結果に由るものゝみならず、幽玄の裡、昭々たる佛陀の加護ありて、而して此の如く盛隆を來たしたる所以なるを察せずんばあるべからず。又一方に於ては、單に自己内心の苦悶悲哀を脱し、平和安樂の境界に到らんの目的を以て、心性解脱を實踐せんと企圖するも、その成就是甚だ難かるべし。縱令成功を得るとするも、その眞髓のなき成就は何等の好果をも意味せざるべし。斯るときに際して成功を望むの心理状態は、その内に不善の煩惱を懷き、總ての希望是れ慾望に過ぎざれば、此の心理現象を離脱せずして、漫然彼岸到達を望むは、畢竟是れ畫空の論、水中の月を握まんとする識猿に似て、其身を危くせざるもの稀れなり。自己の罪惡滿ちて、罪惡を自覺せざるものは、よしや幾千劫を經と雖も殆ど其名號さへ聞くに容易ならざる佛陀の敎訓、殊に内藏聖法の戒律に全精神を提げて思考修行せざるべからず。而してその修行思考の心力と能力との如何に由て成功を期待し得べきのみならず、從て持戒修養の完成に達し、遂には圓滿なる佛果を獲得するに至るべきなり、佛敎を研究し、佛陀の敎訓に從ひて心靈上の悟達を期する者は、須らく此に注意して、各自の志願目的を達すべく勉むべし。

第六章 喇嘛教黃派の教義

戒律説明の四分別 四分律の必要なる總ての眞髓奥義を蒐集せる戒經に就て、その意義を明晰正確に説明せんに四個分別を以てせん歟。左の如し。

一、名目の意義 *mTshan-Gyi Don.*

二、翻譯の敬禮 *hGyur-Gyi Phyang.*

三、本文の意義 *sShun-Gyi Don.*

四、最後の意義 *mD sug-Gi Don.*

第一名目の意義に就て 梵語に毘那耶修特羅と云ひ、西藏語に戒律經 *Pa-Dul-Bala mDo.* と譯す。其題目を戒律の經と名けらる、所以は如何といふに、(甲)戒律なる音義と、(乙)戒律を説ける語句との二義を以て説明すべし。(甲)は即ち身三口四の七捨、及び從屬的の持戒の謂にして、由つて以て煩惱を伏し、五根を化するが故に戒律と云ふなり。(乙)は即ち釋迦の説き給ひし四分律是れ也。此四分律に依て聖教に信念を寄せし諸の修道者は、身口意三業の何れかの行をも爲し、或はなざるゝものを教化して、諸の沙門を律するに由るなり。その經なる意義は、四分律に依て人類の各々が解脱を得すべき諸種の律儀を得ざるものは之を得んことを要し、得たりとするも、破壊せざるべく守護を要する

もの、或は破壊せば再び得んことを要せざるべからざる等の方法は、持戒禪定智慧の三方式を準修するにありて、その嚴格なる規定は、一に經中に集存するが故に、之を戒律の經と名くるなり。

第二翻譯の敬禮に就て 卽是れ一切智者に敬禮するの意なり。多くの翻譯家が戒經及其の註釋書を譯出するとき、一切智者に敬禮すとの略語なり。而して此くなしたる因縁は、毘那耶の説ける各清規を如法に修守せば翻譯の正確流暢を得るに近きも、若淨行に粗行なる者は、切に戒條を精修せずんば、その翻譯の妙微雅緻を顯彰する能はず、却つて難解を生ずるに至るのみならず、正邪善惡の異同より取捨の褒貶批評を生じ、我獨り釋迦の眞髓を識れり、他人焉ぞ此の如き能力を翻譯の上に振ふを得んやとの諍論執僻の惹起するなきを期し難き故に、斯く翻譯敬禮の必要あるなり。

第三本文の意義に就て 本文の意義に二あり。(一)に戒律の緊要なる諸種の註解、(二)に本文の實義是れなり。(一)は解脱の果徳をして眞實に成せしむるの方は、卽ち持戒の力に由るなり。戒經の意味を平等に會得するの必要と、其結果との如何は、卽ち是れ解脱涅槃を得せしむると否との最高の了解なり。而して之を悟得するの方便は蓋し三學にあり。三學中最も必要なるものは戒律の根源にして、解脱涅槃に缺くべからざる最良法なり。解脱の彼岸に開導する楷梯持戒は、卽ち七棄捨と、其從屬的戒律にして、邪淫、偷盜、殺生の身業三棄戒と、妄語、惡口、兩舌、綺語の口業の四棄戒なり。其他飲酒戒等は之れが從屬戒たるなり。然れば此本文に依憑して釋迦の敎訓を履行するの輩は、

何れをも等しく會得すべきもの、等しく會得せる結果、或は彼の結果を得べき方法の何れをも得たるもの等、或は戒律の條項の總べてを試修する状態の奈何に由て、其が結果に影響する幾多の方法を教ゆなり。此の故に本文問題の注意に就て、緊要なる註解を要すと云ふ所以なり。緊要等の四法の全部の必要なるは諸大乘の等しく認めて主張するところなり。解脱得道に志す各人が遵修する戒法宣誓の履行者を分類せば、比丘、比丘尼、比丘と沙彌との中間に位する准比丘 (d^g-Slob^{pa}-Ma) 沙彌、沙彌尼、優婆塞、優婆夷、在俗定日齋戒者 (毎月初八日、十五日、二十九日) の八種とす。然らば此問題本文の第一に注意すべき條項は、僧伽の總會ありし折に、若一般の者が相排擠して一致調和を缺くが如きあらば、疾くに調和融解を謀らざるべからず。是れ世尊入寂の際に遺誡し給ひし金言なればなり。之を要するに、一切の經典は、悉皆解悟越超を教ゆるものなりと雖も、然も解脱涅槃の直門は、毘那耶の實踐にあるを忘る可らず。

(二)の本文の實義に就て亦二あり。(1)淨行を希望する人間、(2)に彼等の學ぶべき教訓、是れなり。

(1)の淨行希望者に就て亦三分別あり。(イ)根本阿含、(ロ)小難 (P^{チヤン}ra^ツn^ツ-I^ツsh^ツg^ツ)、(ハ)願求の場合是れなり。(イ)根本阿含に亦二あり。(イ)昔の儀軌 (Shon^イ-Chog^ツ)、(ロ)現在の儀軌是れなり。昔の儀軌とは服裝を規條に準じて着し、年長者を次第に敬禮し、合掌蹲踞して三度願求し、四度目に引續きて出家し、具足戒を受くべき時期の接近するが如き方法を教ゆるを昔の儀軌と云ふ。蓋し是れ現在の直接に行

ふ儀式よりも前にして、長老等と共に行ふよりも前なるが故なり。先きに吾人の説明せし如く、世尊の住し給ふ場處の甚だ程遠くして、直接世尊より戒法を授かる能はざる者は、殊更遠方より來りて具足戒を願はざるべからず。かゝる者の根途に於て不期の災厄を招き、或は死を致すものある場合に、其友たりし同行者は、世尊のもとに無事に到着して、我友聲聞等は路途甚だ遼遠にして不幸を招きたる由を述べけるに、世尊は今後若道の遼遠なるときは、其附近に集まれる僧伽の誰にも乞ひて出家し次で比丘戒を授かるも、將た直接我に就て授かるも、具足戒會の効果に於ては敢て等差あるを見ず。授戒の眞價は二者共に同じきなりと訓誡し給ひしが如き例は、即ち是れ昔の儀軌なりといふべし。

(ろ) 現在の儀軌に就て亦三分別あり。(ア) 律儀を未だ得ざる者の得べき方法。(イ) 律儀を得るもそれを破壊せざる様護る方法。(ウ) 不相應の缺點を去るべき名目是れなり。(ア) に亦二あり、(一) に前に引續て沙彌戒を得んとする方法。(二) に後に引續きて具足戒の誓約を得んとする方法是れなり。(一) は出家沙門となりしより、次で沙彌戒を受くるに接近せる方法是れなり。昔沙門悉達が佛陀となり給ひしより六年を経て父王を見んとし給ひしや、其從者優陀夷(Chāṭi-Ka; Udayi)をして比丘たらしむべし、舍利弗をして具足戒を授けしむるに、今の方法に依て行ひし例の如き即ち是れなり。

沙彌の制規

(一) 沙彌となるべき方法を説明せる經意を檢せんに、釋敎に出家せんとするものは、最

初に生家の特性と風習等を抛棄せざるべからず。此行爲を敢てなさんとの精神の状態、及び自己の周圍に於ける權力、名譽、財産等を捨て、事實解脱に達せんとの精神を起さんことを要す。而して父母の命名せし自己の姓名をも捨て、長老及教師を敬禮し、喇嘛となり、或は學生となる意思、殊に長老或は教師とならんとするの意思、首座、教師を如何に尊敬すべき歟の方法、長老教師に對しては直接その名を呼ばずして、尊き長老、或は首座と呼ぶが如く、師弟間の道德的關係を教ゆる方法。他の學者に對するときの稱名の方法。自己よりも年少者の名を呼ぶなど、學生の守るべき必要なる多くの規定を設けたり。

具足戒誓約の三方法

(二)後に引續いて具足戒の律儀を得んとする方法に亦三分別あり。一に準備の

法儀軌 (Sbyor-Bahi Cho-Ga) 一に基礎の儀軌 (d'Nos-Shi'i Cho-Ga) 二に最後の儀軌 (mjug-Gi Cho-Ga) 是れなり。一に準備の儀軌とは僧伽に就て具足戒を受けて比丘となるの方法なり。僧伽に敬禮して授戒を乞へば、自己の故障の有無の尋問を受けざるべからず。完全なる授戒者に就て、具足戒を受けんには沙彌となりし後十年を経過せざれば能はず。而して授戒會には、授戒に必要な戒を授かるべき長老等の全部の集席を要すべし。若夫れ大國なりせば、僧伽の數も亦十人の立合を要すべし。寒村僻地の如き小國に在りては五人の比丘の立合あらば授戒を執行し得べし。或具足戒會の規定に準じて不足を充たさんとする時は十三名を要す。總ての事情が規條と相一致せば戒會を

開くを得べく、從て受戒者は、自己の道德上の罪惡を懺悔せざるべからざるものあらば充分に改悔して、受戒誓約を完全に表せんことを要す。戒式の座に於ける作法、受戒執行の儀式、受戒者の戒結の成就を思ふ清淨心、作法の習練、時刻の定示、秘密事情の改悔、鐵鉢の尋問等具足會に必要な準備方法を精細に説明せり。

二に基礎の儀軌とは、戒律を受けんとする時期に接近し、受戒に適當なる規定條件を完備せる本質基礎を成就せざるべからざるの謂ひなり。受戒に必要な條項を備へ、自己の故障の有無を質されし後、十名の立合の間に於て誓約を表し、歸敬の四度目より正に比丘戒を受くべき時期に接近して、その基礎を成就せざるべからず。

齋戒の日規 三に最後の方法に就て亦二法あり。一に齋戒の日と、齋戒の日に非ざるを定むる時刻を知るの方法。二に知りたる敎訓を守護せんに、料簡勸言を稱讚せざるべからざるの方法是れなり。初めに齋戒の日と否とを定むる時刻を知る方法とは、指の長さ四倍程の木枝を地上に立て、太陽の投影を測りて時刻を定む。此は受戒者自から觀測せざるべからず。即ち晝夜の部分、早朝等の時刻にして、春夏冬の三季と、夏の長き日と、短き日とに互りて觀測し、冬季は四ヶ月間、春季は一ヶ月間、夏季は晝一日間、夏の長短の日は、三ヶ月間の規定に依る。又毘那耶の説明する時刻の連續、規則に就ての知覺、各人の知顔と、人數の調査、具足戒を受くべき時期、場合等の方法を明晰に説

明し、あれば夫等の方法を大小漏すなく守らんことを要す。終りに、知りたる教訓を守護せんに勸言を稱せざるべからずとは、規定せる諸種の勸言を唱稱せるの謂ひなり。即ち道德上の罪惡を犯せし行爲、或は比丘の衣體等に就ての訓戒なり、殊に性慾生して持戒に影響するものは、眞實戒法を嚴守し、その規定の勸令料簡を念稱して、それ等の邪念を減退し、實際の道に立入る様修業せざるべからず。持戒者を教育するの目的を以て製作せる種々の繪畫彫刻の標本、或は濟度實修を要せば、從て之を成就するに至らん。縱令勸言を念稱せずして完全に知得を成就する者と雖、亦之を稱せざるべからず。尊敬崇拜の美德をも實際的に行ふべし。結果を成就せしむべき稱讚の方法、及び條規等具さに説明して、具足戒成就の資料に備へしなり。勸言十一ヶ條を誤謬なく稱し、其規條の意義を了解せんと欲せば、諸の比丘は如何にして遵守し得べき歟の毘那耶に於ける各規條の實踐的方法を會得するに至らん。此故に比丘戒の誓約を表せし時より日々の食物も一樣になし、樹下に宿り、藥蕒を選びて袋に收るの規條、人より誹謗せらるゝも返謗をなさざる規條、或は沙門の四法に於ける教へ等、戒律に依て説明せる諸の罪過を性命の爲めに犯すべからず。長老、僧伽の前に於て、宣誓歸敬を表せし以上は、事行の何たるをも誰人行がふと雖、其は決して矛盾睽違に陥るべからず。

(イ) 誓約をなすも、其を破壊せしめざる様護るべき方法に亦二別あり。一に教師と學生との規律、二に教師と學生との名是れなり。第一は學生は教師に問はずして何事をもなすなかれ。但し日常の

食事起居等の不緊要なる事項は敢て問ふを要せず。第二は具足戒を成就して比丘となるも、十年を経過せずば長老たり、教師たるを得ず。

長老の二十一要件 蓋し其の意は、尙學行の事項多くして、出家沙門の長老となるには、五重二十一件の要素を具備して、難易何れをも知るべき五重要件を悉皆具足するを要すればなり。五重二十一件とは、十年を経過するを要すること、保持、熟達、了知、明了、入持、學と入學との二、完全の二、三種、學と不學との自覺。住家の豫備、道德上の罪の自覺、等なり。之を詳言せば、十年經過の五、經律論三藏を保持する能力の五、三藏に熟達するの五、三藏を了知するの五、三藏を明了にするの五、三藏護持の能力の五、三學を學ぶの五、三學を學ぶ能力の五、行爲等三瑜伽を學ぶの五、同三瑜伽を學ぶの五、完全の上の五、完全の下の五、憶念の五、内心清淨の懺悔の五、平等に懺悔すべき五、學の五、不學の五、苦を識るの五、永久教師としての豫備の五、一時教師としての豫備の五、道德上の罪惡自覺の五、等是れなり。

十年經過の五とは、比丘となり、具足戒の誓約を常に過失なく守りて十ヶ年を経過して、自から看護に適すべくば、他人の看病をなし得るの能力、心に道德上の罪を犯せしとき、其が悲嘆を保ち得べくんば亦他人の罪を保護するの能力、害惡を懷ける者の顛倒の六十二見を自から離開し得べくば、亦他人の顛倒を離脱せしむるの能力、學生弟子喇嘛等の悦ばざるものと自ら排棄し得べくば、他

人のも排棄し得るの能力等なり。二に三藏護持の五には、毘那耶、經部論部の三藏を保持して、戒法を有つこと、反對に打勝つ爲めに自他の存在の意義の兩端にまで精進する等の五なりとす。此五重に就て毘那耶の教へは、諸の保持すべきもの、中に於て最も必要なれば、教法を熱心に持つ諸善人は、毘那耶が命ずる訓戒に依て化の五重の要件をも知らざるべからず。乃ち是等五重の義を詳細に研究せば總べて三藏の意義を明白に了解するに至らん。殊に阻礙、成就、施與の三者に於ける條規の一切を知りて安樂を得る目的を有し、釋教を熱心に持修する諸人は、毘那耶の各細詳たる條規を知り、夫れに由て以て、その實行習練に達せざるべからず。

三に過誤の結果に就ての目名とは、初め出家せんとするとき、彼等は外道なるや否を尋問し、外道ならざれば出家たるを得べし。而して過誤の生ずる場合に、誓言上の過誤、誓言を要して沙門となるべきの過誤、誓言に従て進む間の過誤、釋教を修する中に、行道に於て秀優端嚴ならざるの過誤、此五種の意義名目に就て充分に知らざるべからず。

明治四十一年七月支那甘肅省西寧府西南一日里程安土地の黃教開祖宗喀巴の誕生せし靈廟に於て譯す
大正九年三月修訂